TADOKU JUNIOR　せかいのなぜなに神話　★★★☆☆ ふつう　604語

Why the Peacock's Tail has a Hundred Eyes

クジャクの羽にはなぜ百の目がある

Florence Holbrook（1902年の本）　**原文そのまま**　朗読：Raybrite

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？　女王ユノーの美しい白いウシを見はるのは、目が百もあるアルゴス。ウシをほしがる神さまの王さまは、歌のじょうずなメルクリウスを送りこんで……。

Juno, queen of the gods, had the fairest cow that any one ever saw. She was creamy white, and her eyes were of as soft and bright a blue as those of any maiden in the world. Juno and the king of the gods often played tricks on each other, and Juno knew well that the king would try to get her cow. There was a watchman named Argus, and one would think that he could see all that was going on in the world, for he had a hundred eyes, and no one had ever seen them all asleep at once, so Queen Juno gave to Argus the work of watching the white cow.

The king of the gods knew what she had done, and he laughed to himself and said, "I will play a trick on Juno, and I will have the white cow." He sent for Mercury and whispered in his ear, "Mercury, go to the green field where Argus watches the cream-white cow and get her for me."

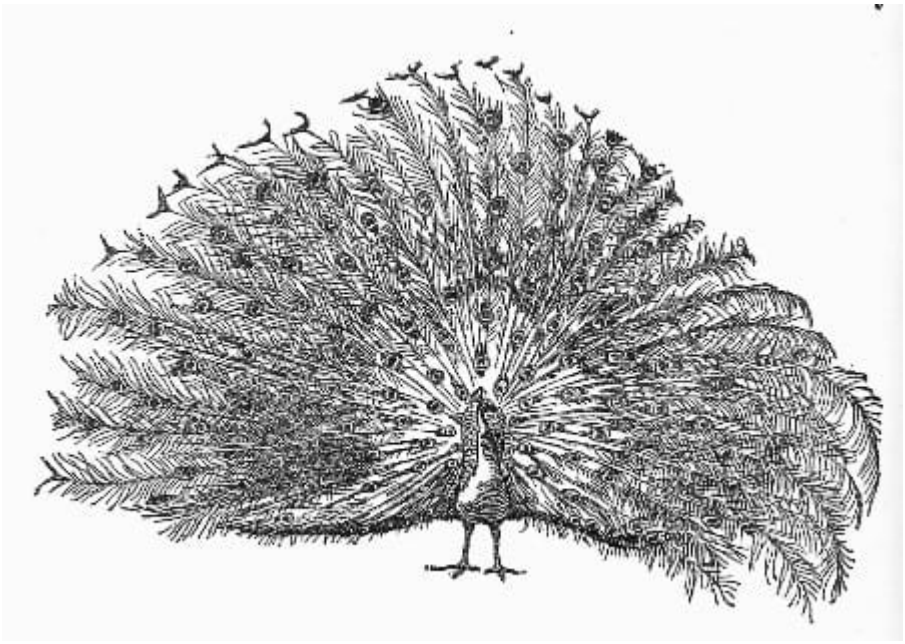
Mercury was always happy when he could play a trick on any one, and he set out gladly for the field where Argus watched the cream-white cow with every one of his hundred eyes.

Now Mercury could tell merry stories of all that was done in the world. He could sing, too, and the music of his voice had lulled many a god to sleep. Argus knew that, but he had been alone a long time, and he thought, "What harm is there in listening to his merry chatter? I have a hundred eyes, and even if half of them were asleep, the others could easily keep watch of one cow." So he gladly hailed Mercury and said, "I have been alone in this field a long, long time, but you have

roamed about as you would. Will you not sing to me, and tell me what has happened in the world? You would be glad to hear stories and music if you had nothing to do but watch a cow, even if it was the cow of a queen."

So Mercury sang and told stories. Some of the songs were merry, and some were sad. The watchman closed one eye, then another and another, but there were two eyes that would not close for all the sad songs and all the merry ones. Then Mercury drew forth a hollow reed that he had brought from the river and began to play on it. It was a magic reed, and as he played, one could hear the water rippling gently on the shore and the breath of the wind in the pine-trees; one could see the lilies bending their heads as the dusk came on, and the stars twinkling softly in the summer sky.

It is no wonder that Argus closed one eye and then the other. Every one of his hundred eyes was fast asleep, and Mercury went away to the king of the gods with the cream-white cow.



Juno had so often played tricks on the king that he was happy because he had played this one on her, but Juno was angry, and she said to Argus, "You are a strange watchman. You have a hundred eyes, and you could not keep even one of them from falling asleep. My peacock is wiser than you, for he knows when any

one is looking at him. I will put every one of your eyes in the tail of the peacock." And to-day, whoever looks at the peacock can count in his tail the hundred eyes that once belonged to Argus.

神さまたちの女王ユノーは、だれも見たことがないほど美しいウシをもっていました。ウシはクリームのような白い色で、目は世界中のどんなむすめの目にもまけないくらい、やさしくて明るい青い色でした。ユノーと神さまたちの王さまは、よくおたがいにいたずらをしあっていたので、王さまがこのウシを手に入れようとするだろうと、ユノーにはよくわかっていました。アルゴスという見はり番がいました。アルゴスには目が百もあって、だれもその目がぜんぶいっぺんにねむっているのを見たことがなかったので、世界でおこっていることは何でも見えるのではないかと思われるほどでした。そこでユノー女王は、アルゴスに白いウシの見はりの仕事をあたえました。

神さまたちの王さまはユノーのしたことを知っていて、ひとりでわらって言いました。「ユノーにいたずらをして、白いウシを手に入れてやろう。」王さまはメルクリウスをよんで、耳もとでささやきました。「メルクリウス、アルゴスがクリーム色のウシを見はっている緑の野原へ行って、ウシをとってきておくれ。」

メルクリウスはだれかにいたずらができるときはいつもごきげんだったので、アルゴスが百の目のぜんぶでクリーム色のウシを見はっている野原へ、よろこんで出かけていきました。

さて、メルクリウスは世界でおこったあらゆることを、楽しいおはなしにして話すことができました。歌もうたえて、その歌声で、たくさんの神さまをねむらせたことがありました。アルゴスはそれを知っていましたが、長いあいだひとりぼっちだったので、こう考えました。「楽しいおしゃべりを聞くくらい、何もこまることはないだろう。わたしには目が百もある。半分がねむったとしても、のこりの目でウシ1頭くらいかんたんに見はれるさ。」そこでアルゴスはよろこんでメルクリウスによびかけて言いました。「わたしはこの野原に長いあいだひとりきりでいたが、あなたはすきなところを歩き回ってきたのだろう。歌をうたって、世界で何がおこったのか話してくれないか？ウシの見はりしかすることがなかったら、あなただって、おはなしや音楽を聞きたくなるさ。たとえ女王さまのウシだとしてもね。」

そこでメルクリウスは歌をうたい、おはなしをしました。楽しい歌もあれば、かなしい歌もありました。見はり番は目を1つとじ、またもう1つ、またもう1つととじていきましたが、かなしい歌を聞いても楽しい歌を聞いても、どうしてもとじない目が2つありました。そこでメルクリウスは、川からもってきたくだのようなアシの笛をとり出して、ふきはじめました。それはまほうのアシ笛でした。メルクリウスがふくと、岸に水がやさしくよせる音や、マツの林をふく風の音が聞こえました。夕ぐれがせまるとユリが頭をたれるようすや、夏の空で星がそっとまたたくようすが見えました。

アルゴスが目を1つとじ、そしてもう1つの目もとじたのも、むりはありません。百の目は1つのこらずぐっすりねむってしまい、メルクリウスはクリーム色のウシをつれて、神さまたちの王さまのところへ行ってしまいました。

ユノーはこれまで何度も王さまにいたずらをしてきたので、王さまはこんどは自分がユノーにいたずらできてごきげんでした。でもユノーはおこって、アルゴスに言いました。「あなたはおかしな見はり番ね。目が百もあるのに、そのうちのたった1つもねむらずにいられなかったなんて。わたしのクジャクのほうがあなたよりかしこいわ。だれかに見られているときは、ちゃんとわかるのだから。あなたの目をぜんぶ、クジャク

のしっぽの羽につけてしまいましょう。」そして今でも、クジャクを見れば、むかしアルゴスのものだった百の目を、しっぽの羽にかぞえることができるのです。

たんご と クイズ　クジャクの羽にはなぜ百の目がある

queen 女王	cow ウシ	eyes 目
field 野原	reed アシ笛	lilies ユリ
peacock クジャク	tail しっぽ（の羽）	

Q1 アルゴスには目がいくつあった？

① 2つ　② 10こ　③ 百こ

Q2 メルクリウスが川からもってきてふいたものは何？

① まほうのアシ笛　② あまいおかし　③ ねむり薬

Q3 アルゴスの目は、さいごにどこへいった？

① ウシの体　② クジャクのしっぽ　③ 夜空の星

こたえ

Q1 ③ 見はり番のアルゴスには目が百もあり、ぜんぶがいっぺんにねむることはないと思われていました。

Q2 ① メルクリウスは川からもってきた、くだのようなアシの笛を取り出してふきはじめました。

Q3 ② おこったユノーは、アルゴスの目をぜんぶクジャクのしっぽの羽につけてしまいました。

原田英語の多読ベストジュニア

本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。

haradaeigo.com/tadokubestjr/

出典　英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #22420（Florence Holbrook、1902年）。パブリックドメイン。
挿絵：(1902 edition)（同じ本の初版の挿絵。パブリックドメイン）
朗読（Web版）：Raybrite（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）
和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは３重チェック。人の目でも順次確認しています。